

SNW 講演・対話 in 北海道教育大学函館校 2022 報告書

日本原子力学会シニアネットワーク連絡会 (SNW) 松永一郎



北海道教育大学函館キャンパス



対話会会場の様子

本報告の構成 (目次)

1. 講演会の概要	1
2. 対話会の概要	3
3. 対話会	5
4. 参加シニアの感想	11
5. 学生アンケート結果のまとめと感想	14
6. 別添資料リスト	15

はじめに

講演と対話会は、北海道教育大学函館校の公開講座「環境と放射線」を受講している国際地域学科の学部1年生から4年生を対象に行われた。

講演と対話会は別々の日に実施した。講演はWEB方式で79名の学生の参加があった。対話は講演の3週間後に対面方式で実施し、講演会参加者から43名が参加した。

講演／対話のテーマは昨今の情勢を踏まえて「カーボンニュートラル(CN)とエネルギー危機から～激動する世界地図の中で日本の対応と進路を考える～」とした。難しいテーマだったが、学生の理解は十分に深まった。

1. 講演会の概要

1) 教職および公務員等を志望する学生79名が参加

- ・国際地域学科の1年生から4年生、79名を対象にWEB(ZOOM MEETING)方式で実施された。受講は大学の講義室
- ・国際地域学科は文系の「国際協同、地域政策」と理系の「地域環境科学」ならびに教育系の「地域教育」に分かれている。
- ・講演は公開講座「環境と放射線」の一環として行われ、単位取得対象になっているので学生は皆真剣である。受講後にレポートを中村教授宛に提出しなければならない。
- ・演題は「日本のエネルギーの現状と課題—カーボンニュートラル(CN)とエネルギー危機～激動の世界地図の中で日本の針路を考える～」とした。
- ・講演会後にアンケートを実施した。講演に対してほとんどの学生が「満足」と回答し、聞きたいことも「十分に聞けた」と回答している。

2) 日 時

- ・6月29日(水): 講演資料を学生へ配信
- ・7月6日(水) 13:00~14:20 : 講演 (WEB方式)

3) 場 所

- ・北海道教育大学函館校 講義室
- ・主催者: 北海道教育大学函館校 国際地域学科 中村秀夫教授

4) 参加者

- ・北海道教育大学函館校: 中村秀夫教授
- ・学生: 79名 (「環境と放射線」を受講する学部1~4年生)
- ・シニア: 6名: SNW 大野崇、針山日出夫、松永健一、松永一郎
SNW 東北 阿部勝憲、中谷力雄

5) 講演

- ・講演者名: 針山日出夫 (元三菱重工)
- ・講演題目: 日本のエネルギーの現状と課題—カーボンニュートラル(CN)とエネルギー危機～激動の世界地図の中で日本の針路を考える～
- ・講演概要: 日本政府は昨年10月に「第6次エネルギー基本計画」を閣議決定した。2050年に温室効果ガス排出量“実質ゼロ”を目指すもので、中間点の2030年では再エネの大幅積み上げを目標に置いている。しかし、今年2月のロシアによるウクライナ侵攻でエネルギー安定供給の先行きとCNの実現性に不透明感が出始めた。そのような中、学生に現状を理解してもらうという目的から、中村教授と相談して講演題材とした。

6) 学生アンケート結果の概要

- ・講演会のあとに学生アンケートを実施した。
- ・参加者の内、エネルギーや原子力への関心があるものは約50%であった。講演の満足度は「とても満足」が57%、「ある程度満足」が43%であった。また、「聞きたいことが聞けた」と答えたものは92%であり、講演が学生の期待に沿っていたことが伺える。

2. 対話会の概要

1) 理系の地域環境グループ所属の学部学生を中心に43名が参加

- ・対面対話
- ・中村教授の地域環境グループ所属の1年生から4年生39名と文系所属の4名、合計43名が参加した。そのうち6名は昨年度のWEB対話会に参加している。
- ・対話会は5グループに分け、対話のテーマは講演と同じ「日本のエネルギーの現状と課題－カーボンニュートラルとエネルギー危機」とした。
- ・対話会に先立ち、学生は「講演会を聞いて理解できたこと」「講演会を聞いて疑問に思ったこと」をシニアに提出した。講演会の内容はかなりの程度理解されており、提出された疑問には本質を突いたものが数多く見られた。提出するにあたり、学生は録画された講演の内容を繰り返して勉強している様子がうかがえる。
- ・シニア（各グループ1名）は学生からの質問に対して回答書を準備、回答書は対話会の前に直接グループ担当シニアから学生に配信された。対話会では学生の質問や意見を中心に意見交換を行い、深掘した効果的な交流を行うことができた。
- ・事後アンケートでは、学生の70%が“とても満足”30%が“ある程度満足”と答えている。“聞きたいことが聞けたか”との質問には22名が“十分に聞けた”と答えており、1名が“あまり聞けなかった”と答えている。
- ・学生の内、半数が初等中等の教員志望者であり、難しいテーマではあったがエネルギー・環境問題が自分たち自身の問題であり、如何にして次世代の児童生徒や同世代の人々に“分かりやすく伝えていくか”という熱意が感じられる対話であった。

2) 日時

- ・7月6日（水）：講演会

- ・ 7月16日（水）：学生からシニアへの質問
- ・ 7月25日（月）：シニアから学生への回答
- ・ 7月27日（水）15:00~17:30：対面による対話会を開催

3) 場所

- ・ 北海道教育大学函館校 アクティブラーニング教室
- ・ 主催者：北海道教育大学函館校 国際地域学科 中村秀夫教授

4) 参加者

- ・ 北海道教育大学函館校：中村秀夫教授
- ・ 学生
 - ◇所属別：43名（地域環境科学グループ39名、文系4名）
 - ◇学年別：1年（8名）、2年（3名）、3年（16名）、4年（16名）
 - ◇性別：男性（23名）女性（20名）
- ・ シニア：5名：(SNW) 大野崇、松永健一、松永一郎
(SNW 東北) 阿部勝憲、中谷力雄

5) 7月27日（水）の対話会スケジュール

- | | |
|-------------|---|
| 15:00~15:10 | オープニング（中村秀夫教授）
SNW 挨拶およびシニアの紹介（大野 崇 SNW 対話幹事） |
| 15:00~15:10 | アイスブレイキング（自己紹介など）
学生リーダーやグループ別発表者の決定 |
| 15:10~16:40 | 対話・・・各グループのシニアがファシリテータとなる。 |
| 16:40~16:55 | ディスカッションまとめ（各グループ学生） |
| 17:00~17:15 | グループ対話発表（3分/グループ）、質疑応答 |
| 17:15~17:20 | 講評（阿部勝憲東北大名誉教授） |
| 17:20~17:25 | クロージング（中村秀夫教授） |
| 17:25~17:30 | 集合写真 |
| 17:30~ | 学生はアンケートへ記入、記入後中村教授へ提出
(注) アンケート用紙は事前にコピーし対話前に各グループに配布 |

6) SNW 代表開会の挨拶（大野 崇 SNW 対話幹事）

- ・ こんにちは。対話幹事を務めます大野崇と申します。
- ・ 我々は、平均年齢75歳のシニアで、日本が原子力の産声を上げたときに原子力に携わった面々で、放射線、原子力エネルギー、廃棄物など多種多彩、また、分野も電力、メーカー、研究所、お役所など多岐にわたるOBです。中

には国鉄（今の JR）の技師長もおられました。また、終戦後シベリア抑留を経験された方もまだ元気です。

・皆様の函館校とは5年前からお付き合いをさせていただいております。私も、対話後に中村先生の闇鍋（おでん？）をごちそうになった記憶を鮮明に覚えております。

・この7月6日に、私共の針山講師から、「日本のエネルギーの現状と課題—カーボンニュートラルとエネルギー危機」～激動する世界地図の中で日本の対応と進路を考える～と題した、最近の世界情勢も俯瞰した講演をしていただきました。

本日は、この講演を踏まえた対話となります。

・皆様の、理解できたこと、疑問に思ったことを読ませていただきました。

「突然化石燃料がなくなったらどうなるのか」など、我々の意表を突く質問もありました。本日は、皆の疑問を一緒に話し合うという対話にしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

7) SNW 代表者の講評（阿部勝憲東北大学名誉教授、SNW 東北）

初めに、コロナ禍の中で準備と対策を行い、日本のエネルギーの現状と課題について、講演に引き続き対面の対話会を実施できたこと、参加の学生諸君と中村先生に感謝します。

対話会プログラムでは、基調講演で「日本のエネルギーの現状と課題—カーボンニュートラルとエネルギー危機」（激動する世界地図の中で日本の対応と進路を考える）を聴講し、それを受けての質問にシニアが回答した情報を共有したうえで、今日の対話会では、エネルギー危機、国内外の状況、原子力の役割と課題、政治への注文、社会受容性の向上などについて理解を深めることができました。さまざまな質問や意見を交わした結果は、良い対話会であったと思います。

最後に、これからは皆さんの時代です。どうか日本が正しい選択をするように考えて行ってください。皆さんの専門である教育、地域環境科学、地域政策はさらに将来に繋げる大切な分野です。どうぞがんばってください。

3. 対話会

（1）グループ1 （阿部勝憲）

1) 参加者

・学生：10名（地域環境科学4年4名、3年4名、1年1名、地域政策2年1名、内女性5名）出身：岩手、宮城各2、北海道、青森、福島、群馬、石川、徳島各1

・シニア：阿部勝憲（ファシリテータ）

2) 主な対話内容

・対話テーマ：「日本のエネルギーの現状と課題—カーボンニュートラルと日本の危機」（激動する世界地図の中で日本の対応と進路を考える）

・学生から基調講演に関連して多面的な事前質問が出されシニアから回答し、その情報を全員が共有し対話した。質問は大まかに下記のように分類できる。

- ① 国際的な動向：カナダのエネルギー供給の内容は、なぜフランスは原子力を継続できているか、英国の気候変動法の改定は現実的か、原子力をなくそうとする国と継続しようとする国の違いは、日本の国際的貢献の可能性は。
- ② 国内状況と国の方針：エネルギー危機と少子高齢化との関係は、エネルギー需要変化に及ぼすコロナ禍の影響は、元首相暗殺の影響は、国の原子依存度低減方針の理由は、政府は本気か、電力ひっ迫には様々な要因が関わるのか。
- ③ 社会的受容性：原子力理解の割合は、改善にはどうすればいいか。
- ④ 再生可能エネルギー：電力ひっ迫における太陽光発電の役割は、太陽光発電に及ぼす自然災害の影響は、バイオマス燃料の問題は。
- ⑤ 化石燃料：天然ガスは何に使われているか、天然ガスの需要の変化と備蓄は、化石燃料は何年持つのか。
- ⑥ 原子力発電：東日本大震災による原子力事故は防げなかったのか、安全ガイドラインはどのように変更されたか、新しいエネルギー開発研究は。
- ⑦ 核燃料サイクル：サイクル課題の解決に必要な施設の規模と数は、廃棄物の対策と周辺地域への影響は。

・Q&Aを踏まえそれぞれ意見を出してもらった。代表的な内容は以下の通り。

- ① 社会的受容性の改善について：SNSは興味ある情報にだけアクセスしアルゴリズムがそうなっているので、やはり講演や対話会のように直接にやり取りできる場が重要との意見。
- ② ウクライナ侵攻もあり国内外のエネルギー問題に関心が高く、各国がそれぞれの事情で取り組んでいることを知り、我が国の将来に目を向ける機会になった。
- ③ 日本の技術による国際貢献は大丈夫かとの懸念が出され、ものづくりの伝統に加えて国際的な戦略の重要性について指摘した。

最後に、何人かの参加者から「学科、学年、ゼミも異なる学生が集まり、他の人の様々な質問や意見を聞いて話し合えたのは大変ためになった」という

感想があり、有意義な対話会であった。

(2) グループ2 (大野 崇)

1) 参加者

- ・ 学生：「地域環境科学」を受講する学部4年2名、3年2名、2年2名、1年1名
(男子学生3名、女子学生4名)
- ・ シニア：大野崇 (ファシリテータ)

2) 主な対話内容

- ・ 対話テーマ：カーボンニュートラル (CN) とエネルギー危機～激動の世界地図の中で日本の針路を考える～
- ・ 学生からの代表質問をシニアと学生間で共有し対話を実施
 - ① カーボンニュートラル実現には、水力、風力、太陽光など持続可能な資源 (再エネ) の積極的取り入れが必要となるが可能か。
 - ② ロシアからのエネルギー輸入がないとやっていけないのではないか。
 - ③ 日本では地熱発電割合がなぜ得少ないのか
- ・ 上記および基調講演に関する学生との主な対話
 - ① CNは地球温暖化が国連で取り上げられクローズアップ。炭酸ガスのせいではないという人もいるが、国連は2021年に疑う余地がないと結論付け日本もCNを宣言。
 - ② 変動再エネはコスト、低エネルギー密度 (広い面積) という点で限界がある。
 - ③ 地熱資源は豊富でクリーンだが、小規模開発がネックで国の計画でも1%がせいぜい。
 - ④ 太平洋側の原発は地震や津波の危険があるのになぜあるのか。迷惑施設として反対が多く地域発展を願う利害が一致した地域に建設されてきた。結果、原発は地域の経済発展につながっている。
 - ⑤ 其の意味では北海道は良いのではないか。
 - ⑥ ドイツは脱火力、脱原発政策をとり、ロシアからの天然ガスに依存してきた。今、ウクライナ問題で困っている。家庭の電気料金は世界1高い。
 - ⑦ 日本にこれ以上原発を増やすことをどう思うか。世論を無視できない。事故前は容認6割、事故後は逆転。ウクライナエネルギー危機で再び容認が増えている。世論は自分の意見の反映。
 - ⑧ 2050年CN達成。日本の排出量は世界の3%。約束しても寄与は小さい。中国などは2050年以降としてできないことは約束しない。

- ⑨ 「人々が安心できる原発はできないのか」原発はどうしても放射性物質がついて回る。事故を起こさないことに尽きる。日本は世界に冠たるトラブルレスの原発を作ったがそれが事故は起こらないという安全神話を生みその風潮に事故は忍び寄った。新しい規制は安全神話否定で 180 度変わった。

(3) グループ3 (中谷力雄)

1) 参加者

- ・学生：10名(4年4名、3年4名、1年2名、全員が地域環境科学科、内女性5名)
- ・シニア：中谷力雄(ファシリテータ)

2) 主な対話内容

グループ3のテーマは、基調講演及びそれを受けた事前質問の回答内容をベースに対話を進めた結果、「カーボンニュートラル(CN)達成のために何が必要か」と「函館に隣接する大間原子力発電所についてどうするべきか」を選んだ。

- ・学生からの下記質問に対してシニアから説明

- ① 日本のエネルギーについての教育はどうなっているのか、再生可能エネルギーを主力にするメリットはなにか。
- ② 日本の脱炭素政策で、2050年までカーボンニュートラル(実質CO₂ゼロ)を目指しているが、現時点から見てこの目標を達成できる可能性はどのくらいか。
- ③ 去年、大間原発を見学し「フルMOX」を知った。どうして「フルMOX」に取り組んでいるのは大間原発だけなのか。
- ④ 原子力発電の問題として、資源問題は多く問題視されますが、環境問題として、海洋に希釈して流しているトリチウムは海洋生物に影響を与えないと言えるのか。
- ⑤ CNの実現は現実的だと思いますか、そうとは思わないですか。
- ⑥ 日本国民は、東日本大震災と福島事故を経験し、原発への不信感がぬぐえていないと考えるが、この不信感をぬぐうためには、どのような活動や政策をしていくことが必要か。
- ⑦ IPCCの報告では、現在の温暖化状況が進行すると2100年には地球の温度が3.2℃上昇すると考えられているが、CNの実行でこの推測から逃れることは可能か。

・上記質問等への回答及び関連する質問への対話の後、2つのテーマに絞り、意見がまとめられた。

- ①カーボンニュートラル(CN)達成のために何が必要か：実現可能性は難しいが、

日本のためには原子力の必要性を学生たち（自分たち）が広めていく必要がある。併せて政治家のエネルギーに対する認識を改めさせ、上の世代にも広めていく必要がある。

- ②函館に隣接する大間原子力発電所についてどうするべきか：福島事故以降、原子力発電所の安全性は高められており、フル MOX であってもなくても原子力の必要性は変わらない。

地元の反対意見の人には、他人事にはならないよう日本全体の、そして自分たちの問題であることを認識する必要がある。

- ③また、対話会を通して、「自分がまず知識を得てから伝えること」、「原子力に対してプラスのイメージを持てたことが良かった」、「教師として偏った意見を保持することは良くない」等のコメントが出された。

(4) グループ 4 （松永健一）

1) 参加者

- ・学生：地域環境科学グループ 6 名（4 年 1 名、3 年 3 名、※2 年 1 名、1 年 2 名）、国際協働グループ 2 名（4 年 1 名、3 年 1 名） ※事前質問のみで不参加
- ・シニア：松永健一

2) 主な対話内容

- ・グループ 4 のテーマ：基調講演「日本のエネルギーの現状と課題－カーボンニュートラル（CN）とエネルギー危機」を聞いて疑問に思ったこと

- ・学生からの下記事前質問に対してシニアから説明

- ① パリ協定は自主努力だが目標達成は可能か。エネルギー脱ロシア化はどうなるか。
- ② 日本が CN に貢献するために、開発に取り組んでいる技術は何か。
- ③ 原子力発電はエネルギー保全に有用な手段。何事にもリスクはあるものではないか。資源小国での安定安価エネルギーとは何か。
- ④ 電力の逼迫や自給率低下の改善に個人ができることは何か。
- ⑤ 原子力発電のイメージ改善はできないか。電力逼迫対策は何か。CN 政策が成功する確率はどの程度か。
- ⑥ 太陽光発電の設置場所は十分あるのか。設置して環境破壊や生態系の崩れが心配されないか。原子力発電はどれだけ必要か。廃炉工事は安全にできるか。
- ⑦ 化石燃料が尽きたらどうなるか。核燃料は尽きたり、自給率が問題になったりしないのか。事故が起こっても数週間で終息する原子力発電設備は作れ

ないのか。

- ⑧化石燃料電源比率の高い日本で、電気自動車を普及させても脱炭素にはならないのではないか。東北大震災後、原子力発電の安全審査はどの程度厳しくなったか。

・上記に関する学生との主な対話

- ① 目標未達時に厳しい罰則を設けないのは、各国が自発的な目標をもって参加しやすくするのが目的。中国、ロシアは口約束レベル。脱ロシア化を意見交換した。
- ② 「グリーン成長戦略」の主な技術を紹介した。欧米は国際競争力を戦略に考慮。
- ③ 安全とは、「許容できないリスクがないこと」であることを認識した。
- ④ 家庭で簡単に出来る、現実的な節電対策と節電の必要時間帯を認識した。
- ⑤ イメージを改善すべき内容と、電力逼迫が発生するケースについて議論した。国際エネルギー機関の評価も CN 政策が実現できる見通しではないことを認識した。
- ⑥ 太陽光の設置場所が限られ、環境破壊があることを認識した。CN のために必要となる原子力発電の数と日本における廃炉工事の実施例を確認した。
- ⑧ 水素エンジン車も選択肢とするトヨタ社長の「敵は（日本が競争優位にある）内燃機関ではない」や「EV 一辺倒の潮流に対し水素エンジン車への選択肢を広げるのは日本の雇用を守るため」という発言に注目した。

・学生だけの対話時間を設け、発表のまとめ方を協議した。結果を簡潔に発表した。

(5) グループ 5 (松永一郎)

1) 参加者

- ・ 学生：8名（4年4名、3年2名、1年2名）（内女性2名）
出身：北海道5名、青森2名、岩手1名
進路希望分野：教員2名、公務員1名、民間3名、未定2名
- ・ シニア：松永一郎（ファシリテータ）

2) アイスブレーキング

・初めに簡単な自己紹介を各自行い、次に結果発表担当者を学生から互選した。

3) 主な対話内容

- ・まず現在のエネルギー危機をどう読み取るべきか時系列的に8項目に分けて説明した。ついで学生からの事前質問に対するシニア回答に関して、分からないことや関連質問、追加質問を聞いた。

- ①エネルギー危機はインフラとしてのバッテリーが開発され、実用化されれば解決へ近づくのではないか？
- ②ロシアのウクライナ侵攻によるエネルギー危機に対して日本の取るべきエネルギー施策は何か？
- ③原子力発電への社会的受容性を改善するために一番効果的なことは何なのか？
- ④日本のマスコミはなぜ原子力利用について消極的な報道しかしないのか？またマスコミ情報と今回の基調講演との主な違いは何なのか？
- ⑤日本の将来のエネルギービジョンは原子力発電と再エネとの併用とのことだが、その比率はどれくらいがよいのか？
- ⑥地球温暖化についてはいろいろな情報が行き交っているが、その正否を確認する上で意識すべきことは何なのか？
- ⑦GHGの排出量の多い上位の中国、米国、インド、ロシアの内、なぜ米国だけがカーボンニュートラルに真剣に取り組んでいるのか？
 - ・ 後半にシニア、学生双方から幾つかの話題を出して対話した。
- ①2018年9月上旬に胆振東部地震で北海道全道ブラックアウトが起こった。その時学生（北海道出身者5名）はどう感じたか。もし、1月の厳寒期だったらどうだったか。電気の重要性についてどう感じたか。
- ②高レベル廃棄物処分の調査が北海道寿都町と神恵内村で進んでいるがどう思うか。
- ③先日の福島第一事故の避難民に対する補償に関して、最高裁で「国の責任」が認められなかったが、そのことをどう思うか。
- ④東電福島第1原発に溜まり続けている処理水とはどのようなものか。

4. 参加シニアの感想

（阿部勝憲）

北海道教育大の対話会は初めての参加で、シニア一人で10人の学生諸君を相手にいい体験になりました。両脇に座った対話会経験のある4年生の二人が自発的にタイムキーパー役や手元資料探しをサポートしてくれ、対話を進めることができたのはありがたかったです。

学生諸君の事前質問は非常に多岐にわたるもので、針山講師の基調講演を熱心に聞かれたものと思います。回答の準備で自分もあれこれ再確認し勉強になりました。対話会ではさらに補足の質問を含めて、原子力の役割を再認識したことや社会的受容性の向上にはSNSより対話を、などの面白い意見を聞いて良かったです。

対話会のまとめに皆さんの意見をきいたところ何人かが、他の人の考え方や

意見を聞いて本当にためになったと話したのが印象に残りました。対話の機会の貴重さを理解し合えたのは収穫でした。教室ではフレキシブルに組み合わせで対話人数に対応できる机により円形に並んで、和やかな雰囲気づくりに影響あるのかなと思いました。

(大野 崇)

- ・ 2年連続 WEB 対話を余儀なくされたが今年度は授業環境が対面に戻り対面対話の実現した。それでも、コロナ第 7 波直前で行動制限が発令されないかの瀬戸際であった。
やはり、対面対話に勝るものはありませんでした。
- ・ 中村先生と世話役の用意周到な準備のおかげで、実りある対話が成立した。特に、個性豊かな講師による基調講演の残像が学生諸君に残っているうちの基調講演に対する追加疑問を話し合う深掘対話であったことから、学生も疑問を解消でき満足したとの声が聞かれた。
- ・ 今回のもう一つの特徴は、シニアのリソース制限から 1 人のシニアが 7～10 名のグループを担当したことであるが、事前にもらった学生からの質問に基づいて、質疑に力点を置いたリードに努めた結果、活性のある対話が成立した。
- ・ 中等理科教員、高等理科教員、公務員志望の学生たちであったが、自分たちが生徒たちにどう教えて言ったらよいかの立場から本対話会に前向きに臨もうとする姿勢が随所にみられやりがいのある対話でした。
- ・ 中村先生から来年度の継続意向を言っていたいただき、本対話活動が教育の場でさらに役立つことを期待したい。

(中谷力雄)

初めての北海道教育大学対話会への参加でしたが、事前に基調講演 (ZOOM) があり、その後聴講した学生から事前質問を受けて回答を作り、それらを基に対面での対話会へとつながり、事前質問への回答作りは大変でしたが、カーボンニュートラル (CN) 等最近のエネルギー問題や日本のエネルギー政策について突っ込んだ議論ができ、学生からも、エネルギー問題について正しい理解と認識ができたとの感想もあり、対話会は有意義であったと感じました。

対話会は広い教室 (アクティブラーニング教室) で行われましたが、50 人程度を 5 つのテーブルに分けて対話したため、隣りグループとの距離も近く且つ全員がマスクで話すという状況で、お互いの会話が聞きにくかったように感じました。今後のコロナ感染状況の進展にもよると思いますが、複数の教室で行えればと感じました。

対話会の目的は、最近のエネルギー問題や原子力を取り巻く環境の理解とそれらに対する正しい知識の醸成にある分けですが、根源的には、発生している課題への正しい認識を持つことの大切さ、特に原子力の問題は他人事になりやすいが、他人事ではなく自分事ととらえることの必要性に気付いてもらうことが目的で、そう意味でも大いに意義があったと思います。

(松永健一)

私は北海道教育大学函館校の対話会には初参加であった。今回の対話会は1グループにシニア1名であり、事後アンケートに学生氏名を記入させる(中村先生のご指示)という極めて異例な形で行われた。その結果、事後アンケートは、学生の氏名、顔と内容の一致する形での、私自身への直接的な評価となり、「対話会は自己研鑽」と位置付ける私にとって「またとない」緊張する機会となった。

また、参加学生の間には、日頃からコミュニケーションの機会があるわけではないことが分かった。「しゃべり過ぎのシニア」への反省もあり、学生だけの対話と学生発表のまとめ討議の時間を多くとった。その時間内に、私はグループ対話の写真撮影をしたり、校舎内や牧歌的な校庭を散策したりして、函館校を知る機会を得た。20数分後に対話会場へ帰ってみると、学生代表が的確に対話参加者の意見をまとめており、その後、簡潔に要領よく発表を行った。

学生からは、対話会に先立ち「基調講演を聞いて理解できたこと」と「疑問に思ったこと」が示されており、それに沿って私の意見を文書で回答していたが、会場では更に発展した議論ができた。また、事前にその疑問が私に届かなかった学生が1名いたり、参加予定表になかった学生が1名参加したりした。両者の疑問には会場で口頭にて回答したが、それらは後日に文書で追加回答を行うことにした。

事後アンケートでは、上記の「学生だけの対話」と「学生発表をまとめる議論」の設定を好評する意見が複数あった。記名する事後アンケートという稀な経験と明確な学生の評価を、次の対話会に生かしていきたい

(松永一郎)

北海道教育大学函館校における対話会は2018年に始まり、今回で5回目である。個人的な参加は2019年からなので4回目である。昨年と一昨年はコロナの影響でZOOMによるWEB対話であったので、対面対話は久しぶりであった。

実施した体感として、「やはり学生の意見を引き出す、本音を聞く」という意味でWEBでは得られない充実したものであった。

今年は基調講演をWEBで7月6日に行い、3週間後の7月27日に対話会を行った。その間に「学生からの質問⇒シニアからの回答⇒学生予習」に時間的な余裕が取れたこともよかった。中村先生の日ごろのご指導の成果と思われるが、学生からの事前質問数も数多く、内容も充実したものが多かった。

難点は、学生数が8人から10人に対してシニアが一人であったこと、全員マスク着用なので声が通りにくく、聞きづらかったことである。グループ編成途中で学生数が倍増したことに加えて、シニアに一人、急に欠員が出てことによる。

しかしながら学生からの意見、質問も非常に活発で非常に良い対話会であったとの印象である。

今年はコロナ陽性者の急増中の対話会であった。来年はコロナが去った中で、学生6～7人：シニア2人という通常編成で、マスク無しで実施出来たらと思う。

5. 学生アンケート結果のまとめと感想

- ・対話会のあとに学生アンケートを実施した。
- ・対話会に参加した学生は39名が理系であり、4名が教育系であった。
- ・そのうち、教員志望が50%を占めていた。
- ・全員がエネルギー問題や原子力への関心を持っており、講演会出席者の50%という数値と対照的であった。
- ・対話会へは70%が「とても満足」30%が「ある程度満足」と答えている。
- ・「聞きたいことが聞けたか」との質問には95%が「十分聞けた」と回答
- ・とても満足した理由として「学生間の意見交換やシニアの多様な考え方に触れることができたから」との答えが返ってきている。
- ・ある程度満足したと答えたものの中から「意見交換、結果のまとめ等の時間が短かった」との意見があった。予め対話の時間配分を考えておく必要がある。

6. 別添資料リスト

- 講演資料：
「日本のエネルギーの現状と課題～カーボンニュートラルとエネルギー危機」
～激動の世界地図の中で日本の針路を考える～
(針山日出夫)
- 学生アンケートの結果（講演）
- 学生アンケートの結果（対話）

(報告書作成：2022年8月〇〇日)

以上